



	表紙	1
	皆様へ	2
	世界ウイグル会議より	
	日本政府へ哀悼の声明文	3
	協会活動報告2010冬春	4
	グルジャ事件追悼集会レポート	6
	ウイグルの	
	「良心の囚人」について	7
	書籍紹介	9
	【寄稿】	
	「良心の囚人を救え」シンポ	10
	請願署名ご協力のお祝い	12
	編集後記	

皆様へ

東北大地震から一ヶ月経ちました、今回の大震災により津波の被害で多くの人々の命が奪われました。まだ何十万の人々が住む場所を失って、避難所で生活することになっております。災害はこれだけではありませんでした。東京電力福島第一原子力発電所も、地震の影響で4基の発電装置からトラブルが発生し、放射能が漏れてしまい、関東地域の住民らの生活にも地震よりも大きな被害を与えてしまい、今もその影響が続いています。

今回の地震が発生したとき私は自宅にいました。テレビの画面から被災地の全てが津波の抵抗できない力により流れていることを見て、流れている住宅、車の中で沢山の命が共に流れていること考えると涙が流れていました。でも涙を流すしか何も出来なかった。ただただ神様に命を助けて欲しいとお祈りしました。大自然の力の前で我々人間はどんなに弱いのかをよく確認できました。

今回の大震災によって亡くなった方々に心よりご冥福をお祈りすると同時に、被災者の皆様が困難を乗り越えて、早急に復興できることを願います。

今回の災害によって日本人の集団的の行動力とどんなときでも冷静に対応する精神に驚きました。こんな災害はウイグル地域または日本以外のどんな地域でも、災害後の人為的な被害は災害よりも大きくなってしまわないと思いません。日本人の災害中も災害後もまずは対人のことを最優先する姿勢に感動し、日本民族に対する敬意が従来よりももっと高まりました。この国に来て良かったと思えます。

こんな素晴らしい文明と文化を持つ国の国民と一緒に生活するのは光栄です。日本が、日本国民が再び世界一流の文明、文化、経済大国なることを信じています。またその目標を目指して皆様と一緒に頑張りたいと決意しております。

日本ウイグル協会としても被災地のために力になれることなら何でもがんばりたいと思えますので、どうか皆様宜しく願いいたします。

イリハム マハムティ

平成23年4月3日

「世界ウイグル会議より日本政府への哀悼の声明文」

日本国外務省

松本 剛明 外務大臣閣下

急啓

3月11日に日本国東北地方を襲った前代未聞の巨大地震がもたらした大惨事に大変なショックを受け、心が痛むばかりです。

私は、世界ウイグル会議及び全世界のウイグル人を代表しまして、日本政府と国民に対して深く哀悼の意を表し、亡くなられた方々のご冥福をお祈り申し上げます。そして、被災された皆様、そのご家族の皆さまへ、心よりお見舞い申し上げます。また一刻も早く行方不明の皆さまのご無事が確認されることと、被災された皆さまが通常の生活に戻れることを心よりお祈り申し上げます。

日本はこれまで何百人ものウイグル人留学生を受け入れ、様々な角度からウイグルを応援してきた世界有数の国の一つであります。私たちはこれまで、ウイグル人の苦しみに同情し、できる限りの応援をしてくださる大勢の日本人の方々に支えられてきました。私たちは、ウイグル人と深い友情が続いてきた日本国民を襲った今回の大惨事に心を痛めており、日本国民がこの悲劇を乗り越える上で、心をともしていきたいと存じます。

復旧には多大なご苦労があるかとは存じますが、日本の皆様がお気持ちをしっかりとたれ、この苦境を克服されますよう、切にお祈り申し上げます。そして、不屈不撓の精神持っておられる日本国民なら近い将来この苦境を克服し、壊滅的な被害を受けた市町村を素晴らしい形で立て直すことができると確信しております。

遠隔地ゆえお役にもたてず誠に心苦しく思いながら、心ばかりのお見舞いとさせていただきます。このメッセージを通じて、日本の皆様に対するウイグルの慰めと励ましの心が伝われば幸いです。

甚だ略儀ではありますが、書中をもちましてお見舞い申し上げます。

草々

2011年3月14日

世界ウイグル会議

総裁 ラビア・カーディル

協会活動報告2011冬春(1)

第三回グルジャ事件追悼行事を開催

2月5日、文京区・文京シビックセンターにて、協会としては第三回目となるグルジャ事件追悼行事を開催致しました。参加者全員で黙祷を捧げたのち山梨学院大学教授 原 百年(はら ももとし)先生より「東トルキスタンにおける紛争の源」と題し、ご講演を頂きました。

講演では、人権思想とナショナリズムの歴史と関係、その定着過程の地域による違いなど、中国の対ウイグル政策の背景について解説されました。

また、ネイション・ステイトとして形成された近代以降の各国家には、中国に政策を改めるよう圧力をかけるような事は期待できず、ウイグル地域における民族問題の改善には、民間の運動が重要であり、さらに、日本国内においても人権意識を高める必要



講演終盤、参加者の質問に答える原教授。

2011/2/5

本講演は、問題の背景についての新たな視点を得るのみならず、私たちが見落としがちで、「おのが身を顧みる」という事について、改めて考えるきっかけにもなったのではないのでしょうか。

内モンゴル人民党主催シンポに参加

3月5日、渋谷区・国立オリンピック記念青少年総合センターにて、内モンゴル人民党主催のシンポジウム「良心の囚人を救え」―中国共産党の人権弾圧の実態―が開催され、当協会も協賛団体として参加し、企画・運営にも全面的なバックアップを行いました。

前半はリ・ガ・スチント氏(内モンゴル人民党日本支部副代表)の司会進行のもと、ケレイト・フビスガルト氏(内モンゴル人民党幹事長)から「ハダ氏」について話され、ジリガラ氏から内モンゴル人権情報センターからのメッセージ(トゴチョグ・エンフバト氏)の読み上げが行われました。



ハダ氏について解説するフビスガルト氏と
広い会場を埋める多数の参加者の方々。

2011/3/5

続いてイリハム会長より「ハイレット・ニヤズ氏」について、小林秀英氏(チベット問題を考える会代表)より「ドゥンドゥブ・ワンチェン氏」について、王戴氏(中国民主陣線)より「劉曉波氏」について、それぞれ話されました。後半は、田中健之氏(チベット友好協会)、北井大輔氏(アジアと中国の民主主義を考える会)、オノホルド・ダイチン氏(モンゴル自由連盟党)、王戴氏、イリハム会長のダイベート形式で行われ、活発な議論が展開されました。

世界ウイグル会議レポート「東トルキスタンにおける人権侵害の概要」日本語版を公開

3月7日、世界ウイグル会議の2月発行レポート「東トルキスタンにおける人権侵害の概要」を日本語訳し、協会サイトにて公開しました。全11頁に渡るため、本会報上には掲載できませんが、是非協会公式サイトにて一読下さい。

「ウイグル人ジャーナリスト解放のための請願署名」運動がスタート

3月7日、ウイグル人ジャーナリスト解放のための請願署名募集を開始致しました。

ウルムチ事件以降、現地のウイグル人ジャーナリストやウイグル語サイトの管理者等に対する不当な逮捕・拘束が行われています。

本請願は、日本国憲法第16条に基づき、中国政府に対する、ウイグル人ジャーナリスト解放に向けた働きかけを求め、日本国会に提出するものです。

署名の募集は、5月31日までとさせていただきます。皆様のご協力を宜しくお願い致します。

協会活動報告2011冬春(2)

世界ウイグル会議より日本政府への哀悼の声明文

3月11日に発生した東北地方を中心とした震災に際し、日本政府にあて世界ウイグル会議より声明を、3月14日に送りました。本声明の全文を3頁に掲載致しております。

世界ウイグル会議事務総長ドルクン・エイサ氏よりメッセージ

オーストラリアでの会議に参加する途上、世界ウイグル会議事務総長ドルクン・エイサ氏が来日し、3月19日、日本の人々にあてたメッセージを送られました。

I would like to express my deeply condolence to Japanese people.

Uyghur is always with Japanese people.

I believe that Japan will be much better than now.

I and my people love Japan!

Sincerely

Dolkun Isa

19 03 11

私は日本の人々に心よりお悔やみ申しあげます。ウイグルはいつでも日本の人々と共にあります。日本は今よりももっと良くなることを信じています。

真心をこめて

ドルクン エイサ

2011年3月19日



震災に際し日本へのメッセージ掲げるドルクン氏。

2011/3/19

また、多くの在日外国人らが国外へ脱出し続けるなか、帰路再び来日され、ビデオメッセージを残して行かれました。

このメッセージは、協会サイトから、またユーチューブから検索してご覧いただけます。

http://uyghur-j.org/news_20110401.html



ビデオメッセージ中、哀悼の意を述べるドルクン氏。

2011/3/30

投稿募集中!

引き続き、会員の皆様からの投稿を募集致します。

ウイグルを取り巻く状況についてのご意見や、今後の活動についてのアイデアなど、ウイグルに関する事なら何でもお寄せ下さい。要項は左記の通りです。

・400字詰め原稿用紙換算で1〜2枚程度

・本名掲載の可否、若しくはペンネームを明記

(ない場合は一律「匿名希望」とします。)

・原稿の返却は致しません。

・趣旨を変えない範囲で編集を行わせて頂く場合があります。

・なるべく沢山の方の原稿を掲載出来ます様努力致しますが、ご期待に添えない場合があります。

・締め切りは、会報発行月(1・4・7・10月)の、前月10日消印有効です。(メールは15日)の、協会アドレス宛てにメールでお送り頂くか、左記住所宛てに封書にてご郵送下さい。

アドレス info@uyghur-j.org

〒162-0067

東京都新宿区富久町16-11 武蔵屋スカイビル405

特定非営利活動法人 日本ウイグル協会

「蒼空」編集部「会員の声」係

協会宛郵便物の住所が変わりました!

これまでの私書箱宛てではありませんので、お間違えの無いよう、宜しくお願い致します。

編集部

グルジャ事件追悼集会レポート

グルジャ事件が起きた13年目の日にあたる2月5日、日本ウイグル協会主催によるグルジャ事件追悼の集会を行いました。

協会会長イリハムよりの挨拶、黙祷の後、山梨学院大学教授の原百年氏より基調講演をして頂きました。グルジャ事件などに見られる民族問題について、ナシヨナリズム政治研究者の立場より、その背景をお話頂きました。

まず、ヨーロッパでルネッサンスや啓蒙思想によって自由や人権思想が発達し、その上でナシヨナリズムが展開していった、そしてネイション・ステイト(国民国家)となった西洋諸国は富国強兵に成功し、これが世界のスタンダードになったと説明されました。

後進国の日本と、日本に学んだ中国のナシヨナリズムは、前提となる人権思想の定着が十分でないまま形式的にナシヨナリズムを導入せざるを得ず、これが中国で今日も見られる人権思想が不在のままの、非人道的なナシヨナリズムとなってしまいました。

中国はネイション・ステイトを形成する際、伝統的な中国ではなく清朝の統治地域を範囲としました。

そして中国のナシヨナリズムは「中華・漢族文化」の独自性の追求と、中国国内の民族の均質性の追求となり、これが中華主義へとつながっていき、少数民族の文化的、政治的、経済的な主権の否定となって、様々な問題のある政策が行われるに至っています。

これが東トルキスタンで起きる紛争の源となっていると説明されました。

中国政府が東トルキスタンで行っている同化政策として、漢族の大量移民、それと同時に進行される若い女性の内陸部への強制移動、民族間の結婚の奨励、漢族文化の強制、少数民族文化の破壊などがあります。このような同化政策が行われる背景には中華主義があり、それが少数民族への蔑視と異宗教への蔑視となります。少数民族の主権は否定されており、具体的には以下のようなことが行われています。

生存権の否定…産児制限や核実験、武力弾圧、獄中死
自由権の否定…監視、強制連行、拷問、言論弾圧、宗教弾圧



集会の冒頭、グルジャ事件で犠牲になったすべての人々に対し、参加者全員で黙祷を捧げる。

2011/2/5

経済発展からの排除…工業部門、石油資源部門、観光部門の漢族支配
政治権力の剥奪…制服を着た漢族の増加、官僚ポストの漢族支配

近代以降、いずれの国家もネイション・ステイトとして形成されてきているため、国連や国際社会は中国に対してナシヨナリズムを抑えるよう圧力をかけることはできないであろうこと、そのためにも非政府組織による草の根運動が重要であり、また日本としてできることは普遍的な人権意識を高め、自国内のマイノリティの権利を擁護すること、これによって中国政府への圧力が可能になる、と結論されました。

グルジャ事件についてだけではなく、問題の原因や背景を分かりやすく論理的にお話頂き、非常に学ばされるどころの大きな講演を頂きました。

東トルキスタンの民族問題を解決していくためには、国際社会や国連、支援してくれる国家に、中国に対抗してもらいたいと望んでしまい勝ちですが、普遍的な人権の尊重ということを草の根的に広げていき、これを中国政府にも中国の民衆にも求めていく姿勢も重要であると思わされます。

貴重な講演を頂きました原先生、またご参加頂きました参加者の皆様、ありがとうございました。

(担当:佐藤)

ウイグルの良心の囚人について

ウイグルの良心の囚人について

2011年3月5日、「良心の囚人を救え」—中国共産党の人権弾圧の実態—と題して内モンゴル人民党主催のシンポジウムが開催されました。他のチベット、モンゴル団体や中国民主化団体と共に、日本ウイグル協会も共催させて頂きました。

中華人民共和国は中国共産党の一党独裁体制下であり、党にとって好ましくないものについては厳しく取り締まりが行われています。基本的な人権である、言論の自由や報道の自由、宗教の自由が制限され、自らの良心に従って行動した多くの人々が不当に逮捕されています。

このような「良心の囚人」について広く日本人に知ってもらおうと共に、即時の解放を求める目的でシンポジウムを行いました。非常に多くの良心の囚人がいる中で、具体例として数名の方にスポットをあて、そこから中国共産党が行っている人権侵害の問題を考えるというやり方を取りました。

モンゴル人の人権を求めたハダ氏、海外のメディアのインタビューを受けただけのハイレット氏、チベットの人の実態を映画にしたドゥンドゥブ氏、中国で民主主義を実現しようと08憲章を提唱した劉氏、はそれぞれ逮捕され、最長15年の懲役刑を課せられています。特にこの名前をあげた方々について、それぞれの団体から講演していただき、パネルディスカッションと質疑応答を行いました。

日本ウイグル協会は今までもウイグルの民族問題、人権問題を扱ってきましたが、今回のシンポジウムを皮切りに、個々の人権問題の解決に向けた具体的な行動として署名請願を始めようと思っております。その最初として、2009年ウルムチ事件以後多くのウイグル人ジャーナリストらが逮捕されている現状を周知すると共に、解決に向けて日本政府に対応を求める請願署名を始めました。

会報と共に同封されている請願署名を読んで頂き、署名にご協力頂ければと思います。

今回の署名請願と、シンポジウムで取り上げたハイレット・ニヤズ氏を始めとしたウイグル人ジャーナリストについての説明と、その背景となつているところを、シンポジウム当日配布資料に若干の修正を加えて、以下述べたいと思います。

ウイグルの現状・ウルムチ事件

現在、中国共産党政府は、ウイグル、チベット、南モンゴルなどの、中国とは異なる歴史・文化を持つ周辺地域に住む「少数民族」の言語や宗教、伝統文化などを奪い、同化しようとしています。

新疆ウイグル自治区(東トルキスタン)では、漢人の大量入植と同時に、ウイグル人の若者(特に女性)の内地への強制移住、という人口政策も行われています。これらの政策に抗議する動きに対しては、「国家分裂主義者」や「宗教過激主義者」、「テロリスト」などとレッテルを貼られ、容赦ない虐殺・弾圧が行われています。

2009年7月5日に新疆ウイグル自治区の首府ウルムチにおいて、ウイグル人達が平和的にデモを行いました。これは2009年6月26日に広東省韶關玩具工場で起きたウイグル人労働者虐殺事件で政府が正しい対応をしなかったため、民族差別、人種差別に対するウイグル人の不満を表現したものでした。しかし、中国政府はこのデモに対し、軍隊まで動かし無差別発砲し、大量の死者が出る悲惨な虐殺事件となりました。

当初、中国政府は都合の良い情報と映像を海外メディアに対して公開したものの、現地の本当の情報が漏れていくことを恐れ、すぐにあらゆる情報を遮断する作戦をとりました。電話は2010年1月末までの7ヶ月間、インターネットは2010年5月14日までの9カ月間遮断されました。中国政府はこの間、何の罪もない多くのウイグル人を捕え、裁判にかけ、地方裁判の判決だけで、死刑や懲役刑を言い渡しました。中国政府の発表でも、処刑されたのは36人以上にのぼります。行方不明者も未だに多数います。

この7月5日の「ウルムチ事件」に関連し、ウイグル人ジャーナリストとウェブサイト運営者の多くが捕えられ長期の懲役刑を宣告されています。

ジャーナリストのハイレット・ニヤズ氏は2009年10月に、ウルムチ事件以前に書いたウイグル人の失業問題や差別の実態などを論じた論文や、事件後にメディアのインタビューを受けたことを理由に逮捕されました。彼はメディアの取材に対して、7月5日の騒乱の根本的な原因は、政府による双語教育(二言語教育)の強要と、ウイグル人の若者を内地に強制的に

移送していることなどがあり、これがウイグル人の不満を高まらせたと説明しました。

2010年7月には、自分で弁護士を選ぶことも出来ないまま、傍聴は妻だけという状況で、1日の裁判だけで「国家安全危害罪」により懲役15年の判決を受けました。

中国の国内法では言論の自由が保証されており、ハイレット氏も裁判で、何ら法を犯しておらず、市民として、ジャーナリストとして義務を果たしたに過ぎないと主張しましたが、中国の犯罪法のあいまいな条項が援用され、有罪判決を受けました。

ハイレット氏について

ハイレット氏は北京民族大学を1982年に卒業した後、出版活動を行い、また東トルキスタンのウイグル人の置かれている状況や文化を中国語で報道していました。彼は新疆経済報 (Xinjiang Economic Daily) の有力な記者でもあり、新疆法律報 (Xinjiang Legal Daily) の編集長、および法律雑誌「法治縦横」の副所長も兼任していました。

またイリハム・トフティ氏が主催するオンラインサイトの Uyghuriz (ウイグルビズ、ウイグルオンライン) では、中国語・ウイグル語の二言語フォーラムの編集者でもありました。また個人のブログも持つっており、頻繁に更新していました。

7月の騒乱の後に、ハイレット氏はメディアのインタビューを受け、騒乱の根本の原因として彼が認識していることを論じました。



ハイレット・ニヤズ氏

彼は、ウイグル人教師の多くが解雇されているウイグル人学校への中国語教育の強制「双語（二言語）教育政策」と、若いウイグル人（多くは未婚の女性）を中国本土の工場で働かせるために強制的に移送する政策にあると言いました。これら政府による政策がウイグル人の不満を高めているとして、7月4日には地方当局に対し、このままでは騒乱が起きかねないと警告しました。当局はこの警告を無視したものの、ウルムチ事件が発生した後にはこの警告をハイレット氏逮捕の口実にしました。

ハイレット氏はウルムチの自宅から2009年10月1日に連行されました。2009年10月4日に、公安は彼の家族に対し、彼が「国家安全危害」で逮捕されたとの通知を送りつけました。そして彼の家族に対し、ハイレット氏が「多くのメディアインタビューを受けた」ために拘束されていると言いました。

ウルムチ事件に関して逮捕された良心の囚人達

ハイレット氏の他にも、ウイグル人の置かれる状況を広めたとして、捕らえられ有罪判決を受けたジャーナリストには以下のような方々がいます。

グルミラ・イミン (ジャーナリスト兼ウイグル語ウェブサイト「サルキン」への寄稿者、2010年4月に終身刑)

メメトジャン・アブドゥウラ (ジャーナリスト兼ウェブサイト「サルキン」の管理人、2010年4月に終身刑)

ニジャット・アザット (ウェブサイト「シヤブナム」の管理者、2010年7月に懲役10年)

ディルシャット・ペルハット (ウェブサイト「ディヤリム」のウェブマスター兼所有者、2010年7月に懲役5年)

ヌレリ (ウェブサイト「サルキン」のウェブマスター、2010年7月に懲役3年)

トウルスンジャン・ヘジム (ウェブサイト「オルフン」の管理者、2011年3月に懲役7年)

他にも大勢の方々が逮捕されています。彼ら有罪とされたジャーナリストやウェブサイトの管理者のほとんどは、国家安全危害罪に問われています。中国当局はウイグル人の人権改善を求める平和的な行動に対して、中国の犯罪法のあいまいな条項を援用して断罪し投獄しています。国家安全危害罪は他の法令よりも更にあいまいであり、「国家の転覆」、「分裂主義」、「機密漏洩」などが含まれ、宗教や言論・集会の自由といった権利に対しても、犯罪であると乱用されています。(担当佐藤)

本文中にもあります通り、本号には請願署名用紙が同封されています。ご協力をお願い致します。

編集部

書籍紹介



私の西域、
君の東トルキスタン
王力雄 著／馬場 裕之 訳
劉 燕子 監修・解説
集広舎

2009年7月のウルムチ事件の報道でウイグルを初めて知った方もいると思われるが、一般にはまだウイグルの民族問題は知られていない。

ウルムチ事件を知っていてもその原因となった6月26日、広東省韶関でのウイグル人労働者襲撃事件やウイグル女性などウイグル人の若者の強制移住については広くは知られていない。

日本ではウイグルの民族問題に関する書物まだ少ないが本書は内容、情報量ともに最良の書物である。

本書で特徴といえるのが作者の王力雄氏が漢人でありながらウイグル人の立場を理解しようとしてウイグル人のムフタルと対話を試みている点である。

従来、漢人の立場からは東トルキスタン（新疆）は古来より中国であり発展する新疆、それに対する分離主義者のウイグル人暴動という視点から書かれてきており、王柯氏の著作「東トルキスタン共和国研究」「多民族国家中国」がそれにあたる。

王力雄氏は本書で「漢人サークルの中で新疆問題を研究するのは、明らかに馬鹿げている。」と述べている。

類書がなく、中国では出版されていないことからウイグル問題の多難さがわかる。

本書は「ムフタルとの出会い」「ムフタルを極秘に訪問」「ムフタルかく語りき」「ムフタルへの手紙」の4つの章からなる。

「ムフタルとの出会い」では王力雄氏とムフタルの出会いが描かれている。王力雄氏はウイグル問題の鍵は新疆生産建設兵団（兵団）にあるとみて兵団の「通達集」を入手し、コピーしたことから公安に逮捕、拘留され拘留所の中でウイグル人、ムフタルと出会うことになる。

前後の経過はまさにスパイ劇かドラマのようであり読んでいてとても引き込まれる。「ムフタルを極秘に訪問」では2003年から2006年にかけての4度の東トルキスタン訪問を記述している、この中では兵団の町などを調査で歩き漢人の兵団の人々へインタビューをしている。

新疆生産建設兵団はいわゆる屯田兵でこの師団、260万人の人員を要する新疆ウイグル自治区の中のもの1つの政府である。

兵団は漢人からは分離主義に対する防御、ウイグル人からは占領軍とみられている。

兵団については日本語で書かれたものはとても少なく、他には小島麗逸氏が「イスラーム諸国の民主化と民族問題」の7章で統計資料から兵団の新疆経済の支配を分析しているぐらいであり、貴重な証言である。

ウイグル自治区は石油と綿花が2大産業であり「一白一黒経済」（綿花が白く、石油が黒いため）といわれるが兵団は綿花を中心に農業、工業で重要な地位を占めている。

「ムフタルかく語りき」は本書の核心部分であり、ムフタルから見たウイグル問題、ウイグルの歴史、作者の質問により漢人、ウイグル人それぞれの立場での考え、利害などが分かる。

中国の領土ではウイグル、チベット、南モンゴルを併せると6割を占めており、また資源も豊富だが元々は後の4割の領土に住んでいた漢人が中国全体の人口の9割を占めている。

東トルキスタンでは中華人民共和国成立時には漢人の人口は30万人以下であり人口割合も7%、ウイグル人は76%だった。

しかし2009年の統計によれば漢人の人口は841万人と激増し人口割合も約40%となりウイグル人は47%と激減している。

漢人の入植をどうするのがウイグル民族問題の最大の課題、難問である。

王力雄氏は「ムフタルへの手紙」で自分の考え方を述べており、自分は東トルキスタン独立に対して否定的でありチベットのように入道路線をとり自治を目指すべきと述べているが、漢人が一方的にこの地に入植して多数派になり、中国の一部になるのはウイグル人には認めることはできないだろう。

王力雄氏の入道路線だが、チベットにおいてもイラマと中国の対話が全く進展していないことから非常に困難である。また中国が民主化しても東トルキスタンが中国の一部であるとの漢人の考えが変わらない限り問題解決できないだろう。

（担当：ムシユク）

内モンゴル人民党主催シンポジウム
「良心の囚人を救え」レポート(1)

去る3月5日土曜日の18時40分より、代々木の国立オリンピック記念青少年総合センター101会議室にて、内モンゴル人民党主催のシンポジウム『「良心の囚人を救え」―中国共産党の人権弾圧の実態―』が開催されました。参加者は日本人の他、日本在住のモンゴル人、ウイグル人、チベット人、台湾人など、百名を超えました。

この日はチベットの新年(ロサル)の祝いイベントも開催中のため、チベット人参加者は他の民族よりも少なかったようです。

さて、シンポジウム名にある「良心の囚人」とはいったい誰のことなのでしょう？

最近では、昨年ノーベル平和賞を受賞した劉曉波氏が有名ですが、本シンポジウムでは、内モンゴルの民族問題を訴え続ける、南モンゴル民主連盟主席のハダ氏のことを主に指しています。

中国当局の違法な弾圧と逮捕に反対する為にモンゴル人学生と共にデモ行進したハダ氏は、1995年12月11日、国家分裂罪およびスパイ関与罪という罪状で逮捕、秘密裁判によって禁錮15年の判決を受けました。

1997年2月、その知らせを受けたアムネスティ・インターナショナルによって、ハダ氏は「良心の囚人」に認定されたのです。



本シンポジウムのポスター。左から、トゥンドゥプ・ワンチェン氏、ハダ氏、劉曉波氏、ハイレット・ニヤズ氏の顔写真が並ぶ。

2011/3/5

ハダ氏は2010年12月10日に釈放される予定だったのですが、その直前に妻のシンナさんと息子のウイレスさんも不当逮捕され、ハダ氏一家は現在も行方不明となっているのです。

当シンポジウムは、リ・ガ・スチント氏(内モンゴル人民党)の司会で進行されました。

まず、フビスガルト氏(内モンゴル人民党)からは「良心の囚人」であるハダ氏をとりあげ、内モンゴルの人権弾圧の実態についてのお話をされました。また、中国による内モンゴルの侵略の歴史について説明していただきました。

中国によるモンゴル人の大量虐殺と中国人の大量移民政策の結果、現在の内モンゴル自治区の構成人口は、中国人が二千万人に対し、モンゴル人はたったの40万人になってしまいました。そして農地政策と領土の砂漠化によって、遊牧民としてのモンゴル人の生活を続けることができなくなりました。

続いてジディカル氏が、トゴチョグ・エンフバト氏の「南モンゴル人権情報センター」からのメッセージを読み上げました。

エンフバト氏は、大学生時代にハダ氏の経営する小さなモンゴル語書店「モンゴル学書社」を訪れたことをきっかけに、ハダ氏の活動を間近に見つけた人です。

ハダ氏の立ち上げた、南モンゴル民主連盟は次の三つの目標を掲げていました。

1. 南モンゴルにモンゴル人による高度な自治をもたらすこと
2. 南モンゴルに独立したモンゴル人の国家を建てること
3. モンゴル国との統一を国民投票で決めること

そしてエンフバト氏は、機関誌「南モンゴルの声」の出版のお手伝いもしました。雑誌の主な内容は南モンゴルの民族問題でしたが、米国独立宣言や国連人権宣言などといった世界の重要文献をモンゴル語訳したものも掲載しました。

ハダ氏は「何かあったときに私たちの活動を国際社会に訴えることが重要になるから」という理由で、外国語の得意なエンフバト氏をモンゴル民主連盟の正式メンバーにはしませんでした。

哀しいかな、ハダ氏の予想通りになってしまったのでエンフバト氏は国外へ脱出、中国におけるモンゴル人の人権侵害の実態を世界に訴えました。

内モンゴル人民党主催集会

「良心の囚人を救え」レポート(2)

その努力の結果、ハダ氏は「良心の囚人」に認定されたのです。

エンフバト氏は1998年に渡米、翌年に難民認定を受け、2000年から「南モンゴル観察」という中国語のメルマガを発行し、南モンゴルの人々に海外在住のモンゴルの運動状況を伝え続けています。

イリハム・マハムテイ氏（日本ウイグル協会）

20年前（学生時代）、モンゴル人が自分たちの文字や言葉を使えないということを見て「我々ウイグル人は沢山いるし、あんなことになるわけないだろう」と考えていたが、まさか十数年でウイグルも同じ様な状況になってしまうなんて思ってもみませんでした。

中国の人権侵害のやり方は前にもまして酷くなっています。

でも今まで世界中は、中国の経済力を前にして、何も口を出せませんでした。しかしこれからは変わってくるだろうと思います。中国でジャスミン革命の運動が伝わっていることは、良いことだと思っています。

現在、中国では、中国語の新聞記事をウイグル語に翻訳してWebサイトに載せただけで逮捕されています。

「良心の囚人」の一人である、ハイレット・ニヤズ氏も同様に逮捕され、秘密裁判によって懲役15年の判決が下されてしまいました。個人のサイトにウイグル語を載せるだけでも逮捕されます。日本の領事すら

拘束されたのです。

なぜそういうことをするのか。それは、中国は正義を恐れているからだと思えます。

小林秀英氏（チベット問題を考える会代表）

小林秀英氏は、国家分裂扇動罪での懲役刑にあるドゥンドゥブ・ワンチェンのドキュメンタリーフィルム「ジグテル 恐怖を乗り越えて」を紹介しました。

そして、チベット語の抵抗歌を発表したことで逮捕された、タシ・ドゥンドゥブ氏の「痕跡なき拷問」の歌詞を朗読し、いろんな人が歌などで非暴力の闘争を続けていることを紹介しました。

また、日本のTV局はあてにならないので、CNNやBBCには中国の実態を知らせる行動をぜひお願いしたいと話されていました。

まず第一に お父さん（ダライラマ法王）が遠くから帰って来ないということ

二つ目には 民族が調和、共存していないという苦しみ
三つ目には チベットが侵略され、自由がないということ
この三つはすべて 痕跡なき拷問

先祖の富が外来者によって持ち去られたという悔恨が一つ

地下資源が自分たちのものではないという苦しみが二つ

我らの民族を絶やすための不妊手術が 三つ
この三つはすべて 痕跡なき拷問

父母の自愛を拒否された苦しみが 一つ

同胞の内なる声を聞くことが出来ない悲しみが 二つ

我々の山河が汚される嘆きが 三つ

この三つはすべて 痕跡なき拷問

我々の山河が汚される嘆きが 三つ

この三つはすべて 痕跡なき拷問

（痕跡なき拷問・タシ・ドゥンドゥブ）

王戴氏（民主中国陣線）

劉曉波氏のノーベル平和賞問題を取り上げ、中国の民主化運動について言及しました。

中国の若者が中国民主化に興味を持つきっかけは、○八憲章、劉曉波氏、ジャスミン革命だそうです。（天安門事件については知らないそうです）

今までの動きをみると、中国に革命が起きる可能性は充分にあると思います。また、国民が豊かになり、年収が3000ドルに達すれば、民衆が目覚めるという統計があるそうです。

「衣食足りて礼節を知る」ではないけれど、やはりお金が無いと、毎日の生活は仕事に追われるばかりで、いろんなことを考え活動することは出来ない、自分の生活を振り返って思いました。



上 後半、討論形式の意見交換。

下 様々な団体・民族で構成された受付スタッフ。 2011/3/5

内モンゴル人民党主催集会

「良心の囚人を救え」レポート(3)

王戴氏は、魯迅の言葉を引用しました。

「もともと地上には、道はない。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ」

この言葉を聞いて、これから我々は、チベット人、ウイグル人、南モンゴル人、台湾人などと協力して、道をつくっていく努力を続けなければ、と改めて感じました。

後半は、田中健之氏(チベット友好協会)、北井大輔氏(アジアと中国の民主主義を考える会)、オノホルド・ダイチン氏(モンゴル自由連盟党)、王戴氏(民主中国陣線)、イリハム・マハムティ氏(日本ウイグル協会)の五名による討論形式で行われ、活発な意見が交わされました。

南モンゴルが滅亡に近いところまで追い詰められたのは、やはり当時は国際社会に訴えることが非常に難しかったからということ、そして現在はインターネットなどの発達により、国際社会に訴えることが容易になってきたので、中国の民主化運動も効果的に行えるようになってきているということは疑いようのない事実です。

そして、田中健之氏の「事実と論理に基づいて、冷静に判断する」という言葉が印象に残りました。

やはり感情だけで動くのは、危険な場合があるかもしれないので、確固たる判断基準をもつことは重要だと思いました。

最後に、全体を通して感じたのは、「次は日本の番」ということです。

多くの日本人は、「まさかこの日本が中国に支配されるなんてありえない」と一笑に付すかもしれませんが、それはまさに20年前のイリハム氏と一緒になのです。このままいけば、20年後、30年後の日本は果たしてどうなっているでしょうか？中国が虎視眈々と日本侵略を狙っていることを認識し、早急に対策を立てなければ、日本は中国共産党に「解放」されてしまうかもしれないのです。

我々日本人は目を覚まさなくてはなりません。チベット、ウイグル、南モンゴル、そして台湾の人々は、この日本に一縷の希望を託しているのですから。

(がにさん)

本シンポジウムは、内モンゴル人民党を中心に、ウイグル協会を含む各参加団体などから、多くの有志が集まり開催されました。本レポートを寄せて下さったのもそうしたボランティアアスタッフの一人です。直前の依頼にも関わらず、寄稿して下さいましたがにさん(H・N)に、お礼申し上げます。どうもありがとうございました。

編集部

編集後記

震災で亡くなられた方々のご冥福をお祈り致しますと共に、被災された方々に、謹んでお見舞い申し上げます。今次震災により、執筆陣の中にも家族が被災された方などあり、お届けが遅延致しました事をお詫び申し上げます。世界ウイグル会議でも世界中のウイグル人に支援を呼び掛けている由、私も微力ながらできる事をやっていたと思いましたが、日本もウイグルも困難は続きますが、後悔の無い様日々精進します。(編集「ぬ」)

請願署名へのご協力をお願い

協会では、「良心の囚人」解放に向けたアクションの一つとして、請願署名運動を開始致しました。

請願内容の詳細は、同封の用紙をご覧ください。

・署名に捺印は不要ですが、自筆に限ります。

・ご住所は都道府県名から記入して下さい。

・締め切りは、5月31日です。

・個人情報保護法に基づき厳正に取り扱い、目的

外には使用致しません。

ご協力を宜しくお願い致します。

宛先 〒162-0067

東京都新宿区富久町16-11 武蔵屋スカイビル405

特定非営利活動法人 日本ウイグル協会



特定非営利活動法人
日本ウイグル協会
Japan Uyghur Association

日本ウイグル協会

公式サイト

<http://uyghur-j.org/>

メールアドレス

info@uyghur-j.org